

大人になれない保育科学生の指導について

—— 保育実習を通じて気づいた問題点と対応 ——

佐藤 達全¹⁾

Providing Instructions to Early Childhood Care and Education Students:

Issues Found Through Childcare Training and Their Countermeasures

Tatsuzen Sato

Abstract

In recent years, there has been an increase in the number of youths “who cannot (or do not want to) become an adult.” This trend also applies to students who are enrolled in early childhood care and education departments. Students enrolled in early childhood care and education departments aim to become caregivers. Yet, although the role of caregiver is defined as “protecting the lives of infants, providing appropriate assistance for them to become independent adults,” in recent years, caregivers have also been expected to provide childcare assistance aimed toward parents and guardians who are having difficulties with child-rearing.

It seems, however, that “only matters related to children” exist in the mindsets of students who are enrolled in early childhood care and education departments.

Although there are many possible definitions of the term “adult,” in this paper, an adult is considered as having “a wide perspective and sense of responsibilities.” Based on this understanding of adulthood, this paper discusses the lack of attentiveness of early childhood care and education departments in order to examine the current state of and response to the lack of attentiveness through early childhood and education classes. The reason for this investigation is that caregivers need to also manage the unexpected behaviors of children appropriately so as to prevent accidents.

Key words: “Studentization”, waiting for instructions, awareness toward caregivers, autonomy, role mode for children

キーワード: 学生の生徒化, 指示待ち, 保育者への自覚, 自立, 子どものお手本

1. はじめに (問題の所在)

近年、「大人になれない」(なりたくない)若者が増えているといわれる。当然のことだが、保育科に入学してくる学生を見ていると同じことを感じる。ただ、保育科の学生が目指しているのは保

育者(幼稚園教諭や保育所の保育士やこども園の保育教諭)であり、その保育者に期待されている役割は、「乳幼児の生命を保護しながら、自立した大人になるための適切な援助をする」ことである。

それだけでなく、最近の子育ての悩みや不安を抱える保護者の増加に伴って、保護者に対する子

1) 育英短期大学保育学科

育て支援や地域における子育て支援事業等の役割も期待されるようになってきた。そうした役割を果たすためには、乳幼児の心身の特徴や発達に関する豊かな知識と確かな援助技術を身につけることは当然であるが、それに加えて大人としてのコミュニケーション能力が必要になる。

ところが、いわゆる「大学全入時代」の短大生には、かなり多くの問題が存在していることが明らかにされている。それは学力に関する側面と人間性に関する側面とに大別されるが、どちらも在学中にしっかりと対応しておかないと、せっかく保育者を目指して入学しても挫折しかねない。そこで、保育者になるために不可欠な保育実習という「絶好の現場体験」を通じて明らかになった「人間性に関する側面」を中心に問題点を指摘するとともに、筆者が行ってきた対応について考えてみることにする^(註1)。

2. 大人になれない若者と大学生の生徒化

まず大学生の生徒化について触れておこう。これまで、大学や大学院・短期大学などの「高等教育機関」で学ぶ者は「学生」と呼ばれ、高等学校と中学校では「生徒」と呼ばれてきた（小学校では「児童」である）。それは、中学・高校生と大学生の間には質的に大きな違いがあると考えられてきたからである。伊藤茂樹によれば「生徒は未熟で他律的、依存的に〈教えられる〉存在であるのに対して〈学生〉は自律的に学ぶ者」と区別されてきたからだという^(註2)。ところが、最近は大學生が自分たちのことを「生徒」と呼ぶことが珍しくなくなってきた。それどころか、大学（短期大学）も彼らを「生徒」として扱う場面が増えていくとして、伊藤は次のように指摘する。

懇切丁寧なガイダンスやオリエンテーションで適応を促したり、担任教員が学習や生活にまできめ細かく指導を行ったり、就職に際して手取り足

取り面倒を見たりといったことは今日の大学では当たり前になっている。これらは学生の確保や大学の生き残りのために必須の学生サービスであるが、学生を「生徒」扱いして自律や自立を阻害する面があることは否めない^(註3)。

たしかに、このような大學生が生徒化してきたという指摘はかなり前から行われている。岩田弘三も「まじめ化する大學生と学生の〈生徒化〉・大学の〈学校化〉」^(註4)の中で、「1990年代中頃から、大學生がまじめ化しているとの声をよく聞くようになった」と述べて、そう呼ばれる理由について次のような伊藤の指摘を紹介している。

- * 自律・成熟した一人の個人としての自己イメージが稀薄である。
- * 大学が与えるサービスに対して受動的に充足し、他のものを積極的に求めない。

また、竹内清は、

- * とくにここ十数年間にどこの大学でも授業出席率はたしかに高まっている。
 - * 高校と同じように、授業では出席がとられ、教師の指示に従って将来に役立つ内容が教えられるべきと感じる。
 - * 大学教師に従順な大學生が増えている。
- と指摘^(註5)した上で次のように言う^(註6)。

これだけ大学教育が手取り足取りでは、企業などに就職して“人材”となりうるのだろうか。「指示待ち社員」どころか、「お客様社員」では困らないだろうか。

さらに、このような状況に対して伊藤は、

「生徒化」した学生を見ると、彼らが幼くなったとか成熟が遅くなったなど、彼ら自身の問題と解釈しがちであるが、それではよくある「近頃の若者は」論と変わらず、より構造的な背景を見る必要がある。

と指摘した上で、その背景を

かつて大学生が自他共に認める「学生」だった時代、彼ら高等教育に進学できた者は、エリート的な（あるいは、それに近い）地位に就ける少数の恵まれた者であり、それは自明の前提だった。その前提のもと、主体的に考えて学んだり、学生運動や対抗文化の担い手になって既存の価値観に異議申し立てをしたりしていたのである。

と分析した上で、

高等教育進学率が上昇して4年制大学だけで5割に達した現在、大学生はもはやそうした特別な存在ではなく「ふつうの若者」である。その彼らが自分のことを「選ばれた者」と意識しないのは妥当なことである。

と結論づけている^(註7)。日経新聞（2015年5月11日）には「生徒化進む大学生 従順だが向学心乏しく」と題する記事も掲載されている。

筆者もこうした指摘と同様の考えであるが、だからといって学生の現状をそのまま見過ごすわけにはいかない。それは、筆者が接している学生の多くが卒業後に保育者として子どもや保護者から「せんせい」と呼ばれる立場になろうとしているからである。幼稚園や保育所やこども園に勤務するためには「幼稚園教諭免許」「保育士資格」といった国家資格を取得しなくてはならず、彼らが目指しているのは「プロフェッショナル専門家」としての保育者だからである。

実際に、筆者が現在の勤務校に就職した30数年前は、保育現場の園長先生方からそのように見られていた。たとえば、卒業生のピアノ技能が未熟であったり担任業務を十分に遂行することができなかつたりすると、「短大を出ているのに」と苦情が寄せられたものである（卒業生が就職して1~2か月後くらいでの話である）。学内分掌で就職指導も担当していた私は、ときどき、そのような苦情への対応に追われたことがあった。

ところが、学生が生徒化したと言われるようになったのと時を同じくするように、卒業生を受け

入れる保育現場から「1年くらいかけて、こちらで育てます」といった声を聞くことが急速に増えてきた。だからといって保育者としての知識や技能が未熟であつて良いというわけではない。その理由は、保育者は就職したその日から、保護者にとって「宝もの」とも言うべき子どもの生命を託されて保育しなくてはならないからである。

そのために、保育者養成校では乳幼児の心身の特徴や成長・発達のプロセス、成長に影響を与える栄養や病気・怪我への適切な対応をするための知識や方法を学修するなど、さまざまなカリキュラムが決められている。また、子どもの行動は、大人の予測を裏切ることが少なくない。それを前提にして「安全」を確保しなくてはならないのであるから、子どもの行動に注意を集中することはもちろん、子どもの行動を予測する想像力や臨機応変な対応力も求められる「大変な仕事」なのである。

さらに、乳幼児はいつまでも乳幼児でいるわけではないので、卒園後を見すえた「人間としての土台作り」（成長・発達の援助）もしなくてはならない。しかも、子どもは身近にいる大人（保護者や保育者）を「成長のモデル」として成長していくのであるから、保育者が「他人ごと」として子どもに指示したり注意したりするのは適切でなく、保育者にはみずからの生き方を振り返ることも求められている。

このように考えてくると、学生が生徒化したかどうかという指摘に関係なく、乳幼児の（いのち）を託される保育者になるためには瞬間瞬間に臨機応変の対応ができるように「注意力をトレーニングすること」や、指示を待つのでなく「主体的に考えたり行動したりする習慣を身につけること」が必要であることに気づくであろう。大学教育が大衆化されたか否かに関係なく、保育者養成校ではそのことを学生に伝えなければならない。

そこで、今回は短大生の実習指導を行う中で気づいた学生の「注意力の欠如」と「まねされる対

象（成長のモデル）という意識の欠如」について考えることにする。

3. 実習日誌に見られる問題点①（注意力の欠如に関して）

保育者にとって「注意力」があるかないか（見るべき所に目を向けているかどうかということ）は非常に重要な問題である。それは、子どもの事故を防いで生命を保護するためには、たえず子どもの行動を観察したり予測したりすることが必要だからである。子どもは「想定外」の活動することが少なくない。大人ならばそれまでの経験から「しても良いこと（危険でないこと）」と「してはいけない（危険な）こと」の判断はある程度できるであろうが、子どもにそれを期待することはできない。そのため、子どもの安全を守るのは周囲の大人の責任なのである。

しかし、「大学生が生徒化している」と指摘される現在は、保育現場で〈保育者の注意力不足が原因とされる〉事故が跡を絶たない。認可された幼稚園や保育所・認定こども園で、年間の負傷者数は1,000人も報告されているし、時には児童の死亡事故さえ発生している。さらに、認可外保育施設においては認可施設よりも高い割合で死亡事故が発生していることが報告されている^(註8)。

それだけに、保育者は常に子どもの行動に目を向けて「想定外の事故」にもできる限りの対応をしなくてはならない。それには日常生活における「注意力を働かせる」トレーニングが不可欠ではないだろうか。ところが、実習日誌や提出された課題文を見ると、「注意力が欠けているであろうと思われる書き間違い」の多さに驚かされる。

* 今回の実習が2回目ということもあって、積極的に子どもと関わったり先生方のお手伝いをさせていたごとうと思っで実習に望みましだ。でも、先生が子どもと関わっているようすを見てると忙しそうで、なかなか積極的

に質問することができませんでした。そのため、担任実習に臨んでも、自分が思っていたような活動ができませんでした（KM）。

* 今日は子どもが少なかったので、年少さんから年長さんまで一緒の保育でした。室内遊びのとき、年長さんは複雑で多くのブロックを使って遊んでいました。でも、年少さんの遊びは複雑な形になっていませんでした。これが2年の差なのかと思うくらい、子どもの発達の違いが大きかったです（SN）。

* 前回の実習では絵本の読み聞かせが上手にできなかったで、先生の声の大きさや読む速さなどをよく見て、見につけたいと思います（MN）。

* 前回の実習では緊張したため子ども達の気持ちを考える余裕がありませんでした。なので、自分のペースで行動することが多かったで、今回は子ども●の気持ちを考えながら接したいと思います（TT）。●には「幸」に「い」が書いてあった。

* 実習では自分の目の前にいる子を見るのに精一杯になってしまうことが多いです。先生は一人ひとりの子どもをよく見て一人ひとりにあった接し方をすることが多いので、全体に目を向けることを意識したいと思います（AT）。

* 私は一人ひとりに応じた接し方ができなかったで、先生の接し方をよく見てまねをしたいと思いました（KT）。

* 担任実習の主活動では、環境構成がしっかりとできていなかったことに気づきました。子どもが安全に過ごせることが一番大切だと考じました。命を預かっているということをお忘れてはいけないと思いました。そのためには、もっと準備をしっかりとすることが大切だ感じました（KT）。

* 子どもたちは道具の使い方が上手で、制作をする前の私の話しも真剣に聞いてくれました。

そして、製作したものを使って遊んだのですが、遊び方の話も真陰に聞いてくれ、遊ぶ時はみんなとても楽しそうな顔をしていました (YK)。

*今日は1歳児クラスに入らせていただきました。お誕生日会では、座っていられる子の方が少ないようすでした。そこで先生がそのようすを見て、静かに座わっていられるように言葉をかけていました。3歳児さんのクラスではみんなが静かに座っていて動きまわる子が少なくなかったので、びっくりしました (TK)。

*0歳児のクラスは初めてだったので、おむつ替えをさせていただきましたが、手早くすることがとても難しかったです。そして、食事の介助もさせていただきましたが、どのくらいの量を口に入れたらよいかわかなくて、難かしく感じました (YO)。

*今日は5歳児クラスに入らせていただきました。文字の練習の時間では、とても丁寧に平仮名を書いていたので驚きました。給食の時間になると、お当番さんが布巾で机をきれいに拭いていたので驚ろきました (SK)。

*以前に来た時とは違った多くの1日の流れを見ることができました。未満児クラスでは、援助することもとても大く、気をつけなければならぬことがたくさんあることがわかりました (KT)。

*子どもの名前も完璧には覚えきれないので、明日はもっと子どもの名前を呼んで子どもたちと接っていききたいです (MM)。

*先生は子ども一人ひとりの特徴を理解していたので、私ももっと子どもの特徴を知って関わっていききたいです (RS)。

*今回の実習で新たな課題が見つかったので、新たため勉強しなければならないと感じました (MT)。

このように事例を紹介していくと、際限がないほ

どで、学生の文章には注意力が欠如していると言わざるを得ない間違いがある。

もちろん、ここで紹介した例文の中にも「正しい漢字を覚えていない」ことによる間違いもあるが、わずか数行の文章に「正しい漢字と正しくない漢字が混在している」という事例は「注意力が欠如している」と言わざるを得ないのではないだろうか。

実際に、学生から提出された実習日誌（保育実習は11日間で、「実習生の反省と今後の課題」というテーマでA4の日誌で毎日15行ずつ書くことになっている。また、実習終了後に「実習生としての全体的な反省・感想・気づき」というテーマで21行の〈まとめ〉を書いて提出する）を点検していると、ほとんどの日誌からここに紹介したような「ちょっとした書き間違い」が何か所も発見できる。

また、このことは日誌だけでなく筆者が行っている授業で学生が毎週提出している課題（作文）にもあてはまる。このことは、文章を書いている時の注意力が不足しているだけでなく、清書をすすめる際にも注意しながら書いていないことを意味している。そのため、このまま保育現場に出たのではうまくないので、筆者は少しでもミスのない文章が書けるようになるための取り組みを行ってきた。そこで、その取り組みの一端について紹介しておこう。

その取り組みの基本は、自分の行動を「きちんと行う」ことを習慣づけることである。短期大学で、一人ひとりの学生と接する機会は毎週の授業である。現在は2年生に対して前期と後期で一週間に一度の授業を担当している。筆者は授業開始前の挨拶と終了後の挨拶を「保育者を目指す学生の礼儀」として重視しているため、第1回目の授業を行う際に「起立して挨拶を交わしましょう」と説明している。

挨拶の方法は①授業担当者（筆者）が入室して教卓の場所に立った時に、学生は号令がなくても

起立すること。②起立したら姿勢を正して総務委員の「礼：れい」という号令でお辞儀をすること。その際に、授業の始まりは「おはようございます」や「こんにちは」と言うこと。授業の終わりはお辞儀をしながら「ごきげんよう」という約束をしている。ところが、毎週の授業でこの挨拶がきちんとできたことがない。

授業中の私語は他の学生の迷惑になるために禁止しているから私語をする学生はほとんどいないものの、居眠りをしている学生が何人もいる。説明を聞きながらメモする学生は非常に少ない。また、ここ数年の傾向として授業終了のチャイムが鳴る5分くらい前になると、説明が終わっていないにもかかわらずノートやプリントをバッグに入れ始める学生が何人も見られる。

このような状況のため、説明をしっかり聞いたリメモしたりすることを習慣づけ、自分のしなくてはならないことにコツコツと取り組む意識を定着させるために次のような試みを実践している。

- ①国語表現の授業では、毎回の授業で題名を示して400字の作文を自宅で書いて次の週に提出する。毎回の授業で15回の作文を提出することで、50点の持ち点が得られる。15回の作文提出が完了しない場合は、持ち点が0点である。期末試験は50点満点のため、全ての課題が出せないと持ち点は0点なので、単位の認定はできないことなどを約束して進めている（これは、文章の上手下手ではなく、努力することを求めているからである）。
- ②作文は回数ごとに原稿用紙の左側に直径が約2センチの○の中に回数ごとの数字を書くこと。原稿用紙の右側の欄外に自分のクラス・学籍番号・作文の題名を書くこと。
- ③原稿用紙は連絡帳を書くための練習の意味で敬体文にしてボールペンで清書し、段落を付けること。

このような約束をしてテーマを指示した翌週の授業開始前に作文を提出する。筆者は毎週、すべ

ての作文を読んで訂正が必要な部分を赤ペンでチェックして次の週に返却している。赤ペンでチェックされた部分は学生に訂正してもらい、3～4回分がまとまったところで再提出する。その際の訂正の仕方や提出の方法についても説明し、赤ペンのチェック部分の訂正ミスや提出方法の間違いがあれば50点の持ち点から減点することを説明している。赤ペンのチェックは、数字を書く際の約2センチという○の大きさや作文のテーマの書き間違いも対象としている。

その理由は、「話をきちんと聞く習慣を定着させるため」と「自分のすることをきちんとする習慣を定着させるため」である。これは、相当数の学生が「なすべきことをきちんと行う」という習慣を身につけていないと感じられるからである。○の大きさを「約2センチ」と指示しているにも関わらず、1センチにも満たない小さな○を書く学生が相当数いるだけでなく、作文の題名を間違える学生もいる。

例えば、本年度第1回目の作文の題名は「後期を迎えての決意」であったが、「後期に向かっての決意」や「後期に向けての決意」と書いた学生が20パーセント近くもいた。また、これは注意力不足ではないものの「迎える」という正しい漢字を知らないために「向かえる」と書いてあった作文が30パーセントにも上り、これはこれで深刻な問題として受けとめなければならないと考えている。

このような学生を、子どもの生命を守れる保育者として業務を全うできるような保育者として送り出すためには、養成校の教員が「人間としての土台作り」にしっかりと向きあっていかなければならないと考えている。

4. 実習日誌に見られる問題点②（敬語や言葉づかいに関して）

次に、保育者（社会人）になるに当たっては言

葉づかい（敬語）も大切なので、同じく実習日誌に書かれている敬語や「話しことば」「ら抜き言葉」等に関する表現をいくつか紹介しておこう。敬語では「〇〇をさせていただいた」と表現すべきところを「〇〇をやらせてもらった」と書いたり「先生に指導していただいた」とすべきところを「先生にしてもらった」と書いたりしている学生が非常に多い。

さらに、基本的には文章は話しことばでなく、書き言葉で書かなくてはならないが、そのことが身に付いていなかったり話しことばと書き言葉の区別がつかなくなったりする学生も少なくない。そのため、上に紹介した「注意力の欠如」と同様に、ほとんどの学生の文章に何らかの間違ひが見つかっている。

*責任実習で、時間がとても余ってしまったので、せっかく責任実習をやらせてもらっているのに自由遊びをすることになってしまったので、もっと前から計画を考えておくべきだったなと強く思いました（AT）。

*緊張して言おうとしたことも忘れてしまった子どもへの反応に困ったりしたけど、制作では子どもも楽しんでくれたみたいで、私も楽しかったです（YK）。

*責任実習では、朝の活動から主活動までをやらせてもらいました（MS）。

*責任実習では指導案を書くことが難しかったけど、先生が丁寧に指導してくれたので、子どもたちも楽しんでくれたようです（SK）。

*2歳児クラスはほとんどのことが自分の力でできるので、見守ることの方が多かったです。絵本も読ませてもらい、「ばけたくん」を読んだ時はとっても反応が良く、読んでる私も楽しくなりました。ピアノも弾かせていただき、子どものスピードに合わせる大変さなどをやってみて感じました（AS）。

*今日は遊ぶ時間が少なかったなので、休憩の時間にそわそわして落ち着きがなかったりと、

やっぱり子どもにとって遊びはストレスを発散できる大切な時間なんだなと思いました（AT）。

*今日は実習2日目で、お誕生会があったので、もも組の子どもたちが元気よく歌を歌っている姿を見れてよかったです（MS）。

*未満児の服を着替えさせようとした時、違う子の服を着させてしまいました。間違っていることを自分で伝えることが難しい年齢だし、服に名前も書いてあるので、きちんと確認しとくべきだったなあと感じました（RO）。

ここに示したような間違った文章例は、（註1）で紹介した論文（拙稿「保育科学生の文章表現力について」）の中でも数多く取り上げているのでこれ以上は触れないが、話し言葉で文章を書いたり実習の指導をしていただく先生に対して敬語を使って表現しなかったりしている事例は、小中学校の学習でしっかりと身につけているはずの内容ではないだろうか。残念なことに、保育科に入学してくる学生の相当数がそのレベルに達していないと言わざるを得ないのが現状である。

しかも、このような事例が、文章表現力だけでなく、数学（算数）や理科や社会など、多方面に渡っていることは否定できない。そのため、一朝一夕にはそうした状況から抜け出すことは不可能であろうが、だからといって手を拱いているわけにはいかない。

そのため、こうした状況をふまえて、国語表現の授業では、実践的な学習として上述のように毎週、作文を提出してもらい、一人ひとりの文章を赤ペンでチェックして自分の間違いに気づけるようにしているのである。そのうえで、気づいたままでは改善されないため、赤ペンでチェックされた部分を訂正して再提出してもらっているのである。そしてきちんと訂正する意識を持つように、そしてそれを習慣づけるため、再提出の場合は正しく訂正していない場合は「減点する」ことを伝

えてある。

毎週二百数十枚の作文を読むのはかなりの時間が必要だが、労を惜しんでいては本学の学生を勉強と前向きに取り組ませることはできない。学生を毎週の作文提出という「これまでにはなかったであろう面倒な課題」に取り組ませるために、授業担当者も本気で取り組んでいる。このような取り組みは一部の在生には（面倒くさいと）不評だが、中には担当者の真意を感じ取って懸命に努力する学生もいる。

それだけでなく、授業を始めて数回は「高をくくって」作文を提出しなかった学生も、担当者の「本気度」が伝わったためなのか、遅れずに提出するようになる場合が少なくない。

さらに、在生には不評だが、卒業生からは「大変な思いをしたし、嫌だと思っていたが、今は（やっておいて）よかったと思っている」という声があちこちから聞こえてくる（お世辞もあるだろうことは承知している）。

ここでは、日常的に「です」「ます」を使って会話するトレーニングについて紹介しておきたい。個人的な見解かもしれないが、本学の学生の日常会話は非常に「お粗末」と言わざるを得ない。とにかく言葉づかいが「乱暴」である。そして、困ったことに彼らの生活する環境がその言葉を容認する状態なのであろう。ただ、保育者になるのなら容認してはいけないと筆者は考えている。その理由は、保育者は子どもが言葉を身につける際の「モデル」だからである。

筆者は、国語表現の授業の進め方として三つの方法を実践している。その一つは示された課題についての作文を提出することである。この扱いは授業中にそれほど多くの時間はかけない。学生が作文を書くのも筆者が赤ペンでチェックするのも、授業時間以外だからである。ただ、赤ペンの意味や多くの学生に共通した間違いなどがあつた場合は授業の中で説明して改善を促している。

二つめは、提出された作文の中から、多くの学

生が陥りやすい文章や参考になりそうな（間違つた）文章をピックアップして「例文集」を作成し、それを印刷配布して授業中に読んで間違いを訂正する。これは、正しい書き方を身につけてもらうためである。例文集は毎年増えていくため、現在までに A4 の用紙で数十枚になっている。

三つめは、筆者が以前に保育関係の機関誌に 1 年間連載した「話すことと書くこと」という 1,500 字ほどの文章（12 回分）を学生に読んでもらいながら、話し方や書き方の要点を説明することである。その中から、今回のテーマに関係する部分をいくつか紹介しておこう。

【事例 1】「コトバにご用心」（月刊仏教保育カリキュラム 2011 年 4 月号から）

◇あなたは「言葉は心の窓」と言われていることを知っていますか。その意味は、私たちが使っている言葉は、単に自分が伝えたい事柄を表現する道具としての役目だけでなく、言葉を話す人の心や人間性も覗かせてくれる窓のようなものだということです。

◇また、「文は人なり」とも言われてきました。文章を読めば、それを書いた人の考え方がわかることは当然ですが、文章が私たちに語りかけるものはそれだけではありません。文を書いた人の性格から考え方の傾向や能力まで、さまざまな情報が読みとれることを意味しています。

◇聞く人の心を明るく元気にする言葉があるかと思えば、反対に、沈んだ気持ちにさせたり不安にさせたりする言葉もあります。これは温かなシャワーが身体や心を温めるのと同じです。ですから、言葉には温度があると私は思っています。このように、言葉の持つ働きは、人と人が考えたことをやり取りするだけではないのです。

◇さらに、言葉を身につけようとしている子どもにとっては、そのお手本としての役割も果

たしています。子どもは、周囲の大人やお友だちが話している言葉を聞きながら、それを覚えていきます。ですから、子どもの周囲にいる人は大人も子どももすべてが先生と言えるのです。

◇「学ぶ」と言う言葉の語源が「まねぶ」だということは知っていますね。「まねぶ」というのは「まねする」という意味です。子どもにとっては、特に両親や先生の話し方が大きな影響を与えています。幼稚園や保育園の先生方は、このことをいつも心に留めてほしいと思います。

言葉には用件を伝えるという役割の他に、このような意味があることを学生にしっかりと認識してもらい、言葉に関心を持つと同時に子どもにまねされても困らない言葉を使うことを心がけてほしいからである。

【事例2】「敬語は心をつなぐ接着剤」（月刊仏教保育カリキュラム 2011年5月号から）

◇ところで、日本語には自分を表現する言葉として「わたくし」「わたし」「ぼく」「おれ」など、たくさん言い方があります。もちろん、相手に対しても、「あなた」「きみ」「おたく」「あんた」「お前」など、いろいろな呼び方をしているでしょう。

どうして、日本語にはこのようにたくさんの言い方があるのでしょうか。それは、自分と相手がどのような関係にあるのかによって使い分けているからです。日本は「タテ社会」と言われます。そのため、私たちは自分と相手の関係において微妙なバランスをとりながら、ちょうどよい距離を保って巧みにかかわりあっているのです。

◇敬語を使うといっても、それほど難しいことはありません。最小限の尊敬語や謙譲語を覚えるだけで十分です。それを上司や先輩や保

護者と話すときに使うことによって、相手を大切にしようとするあなたの気持ちが伝わるはずで、敬語は、人の心と心をつなぐ強力な接着剤の役割を果たしているのではないのでしょうか。

敬語を苦手と感じている学生は少なくない。さらに、敬語を使うと「よそよそしくなってしまう」とさえ感じている学生も多い。しかし、「タテ社会」と言われる日本では、自分と相手の関係を意識した接し方を身につけることが欠かせない。これも、一朝一夕にできることではないため、学生でいる間に少しずつ練習する必要があることに気づいてほしいからである。

【事例3】「よそ行き言葉を身につける」（月刊仏教保育カリキュラム 2011年11月号から）

◇生まれて間もない頃は何の言葉も話せなかった赤ちゃんが、誕生して二か月が過ぎる頃には喃語を口にし始め、やがて少しずつ言葉を発するようになります。赤ちゃんはまわりの人が話すのを聞いて、それをまねすることで言葉を身につけると同時に人格も形成していきます。

◇「子どもは自然に言葉を覚えるのだから特別に意識して話す必要はない」と思いこんでいる人もいるようですが、そうではありません。たしかに、子どもは周囲の人の会話を聞きながら言葉を習得していくのですが、符号としての言葉さえ話せるようになればよいわけではないはずです。

◇大事なことは、他人と心を通わせるための日本語が話せるようになることではないでしょうか。そのためには、まわりにいる人が自分の話す言葉と話す際の気持ちに関心を持つ必要があるのです。絶え間なく耳に入ってくる言葉だからこそ、無神経な話し方は避けなくてはなりません。

◇ところで、言葉の習得にはお母さんだけでなく立場の異なる保育者の存在が重要な役割を果たしているのです。英文学者の外山滋比古先生が、バーンスタインという教育学者の考えを紹介しています。「子どもには親しい人同士で交わす普段の言葉だけでなく、改まったよそ行きの言葉も教えなさい」という興味深い内容です。

バーンスタインはさらに「子どもの知的能力は、改まった言葉をどれくらい身につけているかによって決まる」とまで言い切っているのです。家庭には、親と子が密着した安心できる場としての意味があります。幼稚園や保育園も、子どもがゆったりした気持ちで過ごせるように、先生がいろいろな工夫をしているでしょう。

でも、先生がお母さんのコピーのような存在であってはいけないことを、バーンスタインは教えているのではないのでしょうか。

◇子どもは未来の社会人です。社会では、普段の言葉とよそ行き言葉を使い分けなくてはなりません。よそ行き言葉は他人行儀で嫌だという人もいますが、大人として相手に配慮する気持ちを示す方法の一つでしょう。子どものお手本として、保育者も正しい話し方を学んでみてはいかがでしょうか。

この話を利用して、筆者は学生に「保育者はバイリンガルになる必要がある」ことを伝えている。ただし、これは筆者が学生の心に強く印象づけるために用いた表現で、バイリンガルと言っても「2か国語が自由に話せる」といった一般的な意味ではない。ここでのバイリンガルは、「ふだん語」と「よそゆき語」を、その場や相手に応じて適切に使い分けましょう、という意味なのである。

既に指摘したように、筆者が接している学生の相当数は言葉づかいが相当に乱暴で、外山が指摘した「ふだん語（友だち言葉）」を濫用していて、

多くの問題があるように思われる。その理由は、彼らの生活する環境がそれを容認していて、小中学校以来、そのことに対する十分な指導を受けていないのかもしれないし、仮に指導を受けていたとしても未消化のまま通り過ぎてしまったのかもしれない。

ただ、保育者を目指すのなら、外山やバーンスタインの指摘をしっかりと受けとめる必要があると筆者は考えている。本章では、学生の実態とはかなり離れた事柄を取り上げたかもしれないが、ここで指摘したような事柄を一人ひとりの学生が意識するようにならなければ、「保育者は子どもと遊んでいればよい仕事」といった、これまでの社会一般の認識から抜け出すことができないのではないだろうか。

そして、それでは保育者が「幼児教育の専門家」であることや、幼児教育がいかに重要であるかが社会的に認知されることも期待できず、結果として幼児教育者の社会的な評価が高まらず、給与等の改善にもつながらないのではないだろうか。ただ、話し方や言葉づかいの問題は、文章の書き方の指導をする以上に困難が伴う。それは、文章の書き方は、学生の書いた文章をチェックして適切でない部分を指摘して訂正するといった「教室で対応しやすい」部分が多いのに対し、話し方や言葉づかいは学生の「日常生活と深く結びついている」からである。

5. 文章の書き方の問題と保育者としての問題の共通点

筆者は実習指導と国語表現（話し方や文章の書き方）の授業を担当してきた。大まかな感じ方ではあるが、平成の半ば頃（今から15年くらい前）までの本学学生の文章力や実習先での話し方（敬語の使い方等）は、それほど深刻な問題を抱えていなかったと思っている。ところが、その後は文章力の低下が甚だしいだけでなく、教員や年長者

と話す際の言葉づかいにも問題を感じるようになってきた。

その理由は、年長者に対して尊敬語や謙譲語を使って話せないだけでなく、子どもに対する話し方が乱暴な場合も少なくないからである。その頃から、実習の指導をいただいた園の先生から「実習日誌の書き方に問題がある」との指摘が増えてきた。そこには、正しい日本語の文章が書けなくなったという問題と、記述内容が表面的になったという二つの問題が含まれている。

後者に関しては、子どもや保育者の言動を日誌に書くことはできるのだが、「事実」を羅列するだけで、「なぜ、そのような言動をしたのか」「保育者がどのような思いだったのか」「保育者がどのような工夫や配慮をしているのか」といった掘り下げが見られないことである。これは、実習に取り組んでいる学生に、そうした意識がないことを意味していて、非常に深刻な問題ではないだろうか。

日本語の文章力に関しては、拙稿「保育科学生の文章表現力について」で問題点を指摘し^(註9)、その後も保育者になって困らないように国語表現の授業を通じて文章力を高めるための取り組みを続けて、その方法や結果について報告を行っている^(註10)ので、詳しくはそれぞれの論文を参照していただきたいが、こうした取り組みを通じて気づいたことは、文章力の低下には文章が書けないといった「How to 的な文章表現力」で終わらせることができない深刻な問題が潜んでいるということである。

それは、文章力の低下は「保育者としての資質の低下という致命的な問題につながる」ことである。それを示したのが、上に紹介した「注意力の欠如」という現象なのである。注意力は子どもの生命を守るために不可欠な保育者の資質の一つであるから、それが欠如していたのでは安心して子どもを託すことなどできないのではないだろうか。そこで、筆者はこれからもこうした問題に取り組

んでいかなければならないと考えている。

註

- (註 1) 学力面に関する例としては、文章力の低下が著しいことも指摘されている。誤字や当て字が問題にされたのはかなり以前のことで、最近では主語と述語がつながらなかったり、文中で「て・に・を・は」(助詞)が正しく使えなかったりする例が非常に多く見られる。こうした文章力の低下に筆者が気づいたのは今から15年ほど前のことで、そのことについて詳しくは拙稿「保育科学生の文章表現力について」(育英短期大学研究紀要第19号、平成14年2月)に取り上げたので参照していただきたい。
- (註 2) 伊藤茂樹「学生と生徒」(日本労働研究雑誌 No.667、2015、62ページ)
- (註 3) 伊藤、前掲誌、62ページ。なお、伊藤「大学生は『生徒』なのか……大衆教育社会における高等教育の対象……」(『駒澤大学教育学研究論集』第15号、1999年、85~92)参照。
- (註 4) 「アルカディア学報」No.591
- (註 5) 竹内 清『学生文化・生徒文化の社会学』(ハーベスト社、2014年、53~54)
- (註 6) 竹内、前掲書、232~233
- (註 7) 伊藤、前掲誌、62ページ
- (註 8) 内閣府「教育・保育施設等における事故報告集計」等参照。
- (註 9) そこで指摘したのは次の問題である。
- ①誤字や当て字が多い。
 - ②主語と述語の関係が正しく対応しておらず、文章の構成がおかしい。
 - ③助詞の使い方がおかしく、正しい日本語の文章になっていない。
 - ④話し言葉のまま書かれている。
 - ⑤「見れる」や「食べれる」はもとよりのこと、「違く」「やっぱし」など「最新のはやり言葉」のような表現がしばしば登場する。
 - ⑥説明文を書く場合、主語と述語が正しく対応していないことが少なくない。
 - ⑦語彙が乏しいためであろうか、同じ形容詞や副詞を何度も繰り返し使ってる。
 - ⑧代名詞を用いて表現することがほとんどないためなのか、具体的な「もの」や「人の名前」などを何度も繰り返し書いている。
 - ⑨文章が長いため、「ので」や「が」といった助詞

を用いてだらだらと続ける場合が多い。そのため、一つの文章が200字～300字も続いている文章を時々見かける。

- ⑩推量表現（ではないでしょうか）がほとんど見られない。これは、与えられることに慣れてしまった結果、想像力が乏しくなったからではないだろうか。
 - ⑪800字程度の文章を書くときに、一つも段落を区切ることがない学生が少なくない。
 - ⑫文末の表現がすべて「思います」や「です」など、ワンパターンである。
 - ⑬文章表現力ではないが、テキストがすらすら読めない学生が少なくない。常用漢字すら完全に覚えていないことと、アクセントがおかしいために他の意味に受けとられかねない読み方をする学生が目立つ。
- (註10) その主なものは次の通りである。
- ①「文章表現力から見た保育科学生の問題点」(育英短期大学研究紀要14、2006年3月)
 - ②「保育者をめざす学生の基礎学力について……文章表現に見える問題点とその対応……」(全国保育士養成協議会 第45回研究大会発表論文集、2006年9月)
 - ③「保育科学生の文章表現に見える問題点……学習習慣と基本的な生活習慣について……」(全国保育士養成協議会 第46回研究大会発表論文集、2007年9月)
 - ④「文章表現力からみた保育士養成の問題点……短大生の学習意欲と基礎学力を中心に……」(全国保育士養成協議会 第48回研究大会発表論文集、2009年9月)
 - ⑤「書くことと話すことからみた保育科学生の問題

と対応について」(全国保育士養成協議会 第51回研究大会発表論文集、2012年9月)

- ⑥「保育科学生に対する作文指導の目的とその結果について……日本語の表現法と保育者論の授業を通して……」(育英短期大学研究紀要30、2013年3月)
- ⑦「保育科学生の文章表現力低下の原因と対応……日本語表現法の課題文と実習日誌を中心に……」(育英短期大学研究紀要31、2014年3月)
- ⑧「保育者をめざす学生の文章力を高めるための取り組みについて……保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習日誌を比較して考える……」(育英短期大学研究紀要32号、2015年3月)
- ⑨「保育実習日誌の文章に見られる実習への取り組み方の問題点……子どもに安全な環境を提供するために……」(育英教育論集第1号、2017年6月)
- ⑩「保育実習指導として不可欠な言葉づかいの指導について……言葉づかいに無関心な学生の増加と対応を中心に……」(育英教育論集第2号、2017年10月)
- ⑪「責任実習の指導案や実習日誌を書くために必要な国語力……学生の会話力と文章力の現状を中心に……」(育英教育論集第3号、2018年2月)
- ⑫「日本語指導(話し方・書き方)から見えてくる学力面の問題点……保育者に求められる文章力(基礎学力)について……」(育英教育論集第4号、2018年11月)
- ⑬「実習日誌の文章から見えてくる保育者としての問題点……注意力や集中力の欠如を中心にして……」(育英教育論集第4号、2018年11月)

(2020年2月2日受理)